

三省堂

# ことば の学び

別冊 | No.01



## 書写教育雑感

— 韓国で気づいたこと

愛媛大学教育学部

三浦和尙

二〇〇二年六月、用事というほどのことではないのだが、私は次男と二人で韓国に渡った。滞在一泊二日のあわただしい旅であった。

勘の鋭いかたはもうおわかりであろう。八方手を尽くしても、正規のルートではチケットを入手することができず、「行きたい、見たい、行けない」と方々でぐちっていたら、奇特にも譲ってあげようという人が現れたのである。ようやくのことです手に入ったチケットは仁川競技場の「フランス対デンマーク戦」2枚。応援していたフランスは負けたが、ジダンの姿を目のあたりにしただけでも十分満足して帰ってきた。

### 韓国の文字

— 漢字とハングル —

韓国に行ってみて、私がいちばん驚いたことは、実は「漢字」の少なさであった。日本では、韓国の人の名前も地名も、漢字で表記することが多い。中国についてもしかりである。韓国の場合、最近では新聞などでカタカナ表記することも多くなったように思われるが、漢字表記を普通だとする感覚は私たちに残っている。

無知な私にも、韓国では「ハングル」という文字があり、それは組み合わせによる表音文字であるということくらいは知識はあった。したがって私は、日本の仮名と漢字のように、韓国では日常的に、漢字とハングルが併用されていると思ひこんでいたのである。

しかし、実際に韓国に足を踏み入れたらどうであろうか。町の通りに立つてざっと見回しても、漢字はほとんど目に入らない。ほぼ百パーセント近くハングルである。電車の駅の表示もまずハングル、その下に申し訳程度に、駅番号と漢字が添えられている。日本の駅表示の反対だと考えればよい。繁華街では、「足裏マッサージ」「メガネ安い」などの日本語が不思議に目につくが、基本的に漢字はほとんどない。

帰り道、ソウルから仁川空港へ行く、異常に運賃の安いバスの中で、私はふと「韓国には立派な筆の文化があるが、ハングル文字をどう扱っているのだろうか。ハングルの文字の作りは、必ずしも毛筆に適したものとは言えないのではないか」と考えた。それは同時に、「日本に仮名書道があるように、ハングルの書道があるのだろうか」

「書道に『漢字ハングル交じり』という概念があるのであるか」  
「韓国では国語科として『筆』を持たせているのだろうか」

「国語科書写に毛筆があるのであれば、それは『硬筆のための毛筆』なのであるか」  
といったさまざまな疑問を導くこととなった。

私が比較教育学の専門家であったり、若干のそういう方向の興味を持っていたりするのであれば、あるいは、私が書写教育の専門家であれば、「実は韓国では……」と得々とここで書き記すところである。しかし、そうはいかないのが専門家でない悲しさである。

### ハングル文字と書

ハングル文字は、一四四六年、李朝の世宗王が「訓民正音」の名で公布したものだという。ということは、ハングル文字自体がはじめは筆で書かれることを前提にしていたのである。当然、ハングルの毛筆の世界があつて何が悪い、ということになる。

実際には、書芸（韓国での「書道」の呼び名）の世界では、「訓民正音」が付されたときの木版の字体に近い「版本体」という字体による作品が生み出されている。これはある意味「楷書」であり、結果的には「篆書」を見ているような感じとなる。筆法もおそらく篆書のそれか、隷書に近いものとなるであろう。

筆という筆記具とハングルという字形を調和させる方向で、その後「宮体」という字体が使用されるようになる。これはあくまでも「筆で書くハングル」であり、行書のようなイメージではない。

しかし、筆で文字を書く以上、行書的な流れを生むことは必然である。それが「くずし字体」と呼ばれるものとなる。

韓国の書芸の世界では、漢字とハングルの混合の形も実践されているようである。ただ、同僚の書道の専門家に聞くと、ハングルの書は「決して一般的なものではない」そうである。

そういった文字文化を持つ韓国の状況について、いささか古い文献ではあるが、鄭充洛チョン・チュンラクという人が「韓国書芸の現在と将来」と題して次のように述べている。

「第一。政府樹立（一九四八年）と同時に、

美術の中に同席することになった書芸において、その教育不在を問題点としてあげることができる。ここでいう教育不在とは、大学での書芸教育を指す。小学校や中、高等学校では基本的な書芸の教育を、足りないながらも各学期ごとに行っている。しかしその内容においては、実際に書芸教育がなされているというよりは、ただ美術教育の時間に(だいたい週二時間ほどのことだけでも)わずかのパーセントだけ形式的に導入されているに過ぎない。

第二。ハングル専用の時代が開かれることにより、そのしわ寄せとなった漢字教育の不足現象があげられる。書芸の本

이다

版本体

자식

宮体

새글씨

くずし体

質が漢字より出発したものと認められるべきものであるだけに、当然ながら漢字の教育が強調されるべきであった。それにもかかわらず、一時は日常生活の漢字を除いて、ほとんどの漢字教育が実施されなかった。そのためいわゆるハングル世代という言葉があらわれるようにもなったのである。(第三・第四略)」

(李信明訳『墨』一九八八年九月十月号  
芸術新聞社)

この文章によると、韓国では筆を国語ではなく美術の時間に持たせていること、筆は書芸の教育という視点から取り上げられていること、漢字の教育があまり行われていないことが推測される。

これらの内容は、私の身近にいる韓国・朝鮮語を母語とする人に確かめたところでもあるが、今現在では少し変わっているかもしれない。

### 中国における「毛筆」

さて、では中国ではどうなのだろうと、私の講座に来ている中華人民共和国の留学生に尋ねたところ、これは意外な答え

であった。

いわく、「少なくとも自分自身の経験で言えば、小学校以来、学校で書道の筆を持ったことはない。芸術科書道というのも記憶にない。美術の時間も高校ではあったけれども、有名な作品を鑑賞することが少しあったくらいで、実際にゆっくり絵を描いたという記憶はない。そういう時間を、物理とか数学といった科目に当てていたように思う。」とのことであった。ただし、文字を美しく書くということについての意識は高く、小学校でも丁寧に筆順や書き方を教えてもらい、一つの文字をノート一ページくらい繰り返して書くようなことはやっていたとのことである。

一緒にいた日本の大学院生が、書道の授業のために持ってきていた、いわゆる「お習字セット」を見せて、日本の小学生はみんなこういうものを持っているのだと説明したら、驚いていた。

一人の学生の記憶のレベルの確認であるから、それ自体が正しいかどうかはわからないし、全国的にそうなのかどうかはましてやわからない。それは本来きちんと確かめてから論及すべきところであるの言うまでもない。ただ、中国で簡

体字が普及し、学校教育でももちろん簡体字が教えられている現状を考えると、国語科として毛筆を持つてはいいというところは、聞く限り不自然ではないようにも思われる。簡体字の形を考えると、毛筆でカタカナを書きにくいのと近い状況が生まれると予想されるからである。無論、中国において書道文化が衰えているということではないし、書道の世界では、旧来の漢字を用いた作品が作られているということである。

### 確かな書写力のために

さて、不確かな情報をもとに思い切ったことを言うべきではないが、「雑感」ということでお許し願えるとすれば、これらの情報は、私なりにいろいろなことを考えるきっかけになったと言える。

中国・朝鮮・日本という、私たちが単純に「漢字文化圏」だと思っているそれぞれの国が、文字に関しては独自の変化を遂げているのである。日本では仮名が作られ、朝鮮ではハングルが作られる。また中国では「古典」の作品も簡体字で

学ぶほど、簡体字が徹底されてきている。それぞれ、その国の文字とことばの歴史の必然の歩みであったのだろう。

転じて、ことばの教育の世界に目を向けてみると、「国語科」として「毛筆」を扱っているのは日本だけであるのかも知れない。これは特殊なのであろうか。

考えてみれば、漢字についても仮名についても「書美」という概念を持ち、長く発展させて来た日本が、近代以降もそのまま「毛筆で書く」という意識を持ち続けたことは、容易にうなずくことができよう。その点では、「ハンゲルの形」が毛筆になじみにくかったり、生活に向かうハンゲルと芸術に向かう漢字といった住み分けの方向性を持つたりした韓国・朝鮮語や、ペンや鉛筆が普及したあとに文字の変化を導入した中国語とは、事情の違いがあるように思われる。

誤解を恐れるが故にあえて申し述べるが、私は決して「毛筆は国語科に必要ない」などと言おうとしているのではない。しかし、現実に「毛筆書写」の世界は、意識として「習字」あるいは「書道」とあまり変わりのない「作品主義」に陥っていたり、「書き初め」という宿題の材

料でしかなかったりしているという一部の現状は認めざるを得まい。

これからの「書写」のあり方を考えたとき、毛筆でできる部分はどこか、毛筆でこそできる部分はどこかという点を見きわめ、そのことによって確かな書写力を育成するという意識が、必ず求められるのではないか。そのとき、中国や韓国で「毛筆書写」がないとすれば、そこで書写学習の内容の何が捨てられているのか、毛筆がないことで問題は生じていないのかといった視点からの検討は、大いに意味あることとなるに違いない。

その程度のことはずでに検討されると、書写教育の世界から叱られそうな気がしながら、私なりの最近の気づきを記させていただいた。私自身は、書写も無論含めた国語教育全体の進展を願う立場を持っているつもりであることは、ご理解いただきたい。

〔みうら かずなお〕1952年、広島市生まれ。広島大学附属中学・高校教諭などを経て、現在、愛媛大学教育学部教授。最近の著書に、『話す・聞く』の『実践学』『読む』との再構築（ともに三省堂刊）がある。